

元田永孚（二）　　ゝおいたちゝ

湯　木　洋　一

（一）

明治期の教育史のなかで果たした役割、公にされた文書などから元田永孚の姿を想像する時、そこに立ち現れてくるのは、高圧的な、自信に満ちあふれた人物像である。ほんとうはどのような人であったのか。元田永孚は、どのような時代に、幼い日々を過し、青年時代を生きて人間形成をしたのか。また、どのような経験と学習を積み重ねて思想形成をなしたのか。権力の中枢部分に位置しての彼の言動を理解するためにも、形成期の彼の歩みを概観してみたいと思う。資料も、研究論文の数も少く、困難な仕事ではあるが、まず、可能な範囲の試みを行いたい。

この作業のための資料としては、なによりまず、元田永孚自身が書き残した二冊の自伝をあげる必要がある。最初の一冊は、一八七八年（明治十一年）から一八八九年（明治十二年）までの年月をかけて自ら書き綴った、誕生より

元田永孚（二）　ゝおいたちゝ（湯木）

還暦（一八七八年）までの自伝『還暦之記』である。次の一冊は、『還暦之記』を書き終えた翌日、一八八九年（明治二年）一月三日から書き始め、逝去前年（一八九〇年）までの短い期間に書いた、一八七八年以後に関する自伝『古稀之記』である。その他、数少い日記の断片があり、これらは、元田竹彦・海後宗臣編『元田永孚文書』第一巻に収められている。⁽¹⁾このほか、沼田哲・元田竹彦編『元田永孚関係文書』⁽²⁾には、かなりの数の差出書簡、来簡が収められている。このように、自筆の資料としては、ほとんど全生涯にわたる記録に接することができる。しかし、これらの自伝は非常に貴重ではあるが、自伝であることの限界をもつことを考えておかねばならない。

元田永孚の生涯に関する伝記、あるいは研究としてあげられなければならないのは海後宗臣『元田永孚』⁽³⁾である。しかし、本書は、一九四二年という時代状況のなかで書かれた著書であり、著者自身も元田永孚について、「……側近に奉仕して御進講に当ると共に、国民教育全般の大本に関する思想を確立し、国民教育に帰趨するところを明示した業績をもって、明治教育史上に全く独自の地位を占めたのである。日本教育史上に数ある先哲の中に於て元田永孚の如き教育主本確立についての業績を残した教育家は他に類例を見ることが出来ない。……」⁽⁴⁾と述べるように、一定の価値規準をもつ立場から書かれた著作であり、元田の教育思想の基盤に検討を加えたものではなく、沼田哲氏も述べているように、「元田永孚の明治期における特異な政治的立場や活動を全面的に検討したものとはいえない⁽⁵⁾」著作である。

この海後宗臣『元田永孚』以後、敗戦後四七年を経た今日でさえ、元田永孚に関する著作はきわめて少い。明治期とそれ以後の教育にあれ程大きな役割を果たした重要な人物が研究対照となることがすくないのは不思議なことである。さらに、数少い元田永孚に関する議論に、あえて問題を正面から取り上げようとする論述が多いのは何故で

あろうか。例えば、江森一郎氏は、『元田永孚』の著者、海後宗臣氏に関して、「……天皇中心の問題はともかく、伝統に足場を置きつつ先進外国文化を広く攝取してゆくことは著者の立場である。……」⁽⁶⁾（傍点は筆者）とするが、最重要の問題の一つとも思われる問題を回避しては、元田永孚への接近を自ら拒むことにはならないであろうか。また森川輝紀氏の論述の中に、元田永孚が父の要請で所属する講学仲間の実学党を離脱したことについて、「学問への義理より、親への孝に殉ずる元田の思考態度は、また実学の一顕出であつたのだろうか」⁽⁷⁾（傍点は筆者）と述べられることについてでも考えさせられる。語られる言葉の意味がよく理解できない。実学とはこのような学問であつたのか、孝とはこのような行為を言うのか、むしろ、この決定こそ、入念に検討されるべき点ではなからうかと考える。

このような状況のなかで、小さな論文ではあるが、新しい政治理念の必要を認識する明治保守主義者としての元田永孚への関心、また横井小楠と元田永孚との関係への関心から書いたと語られる沼田哲氏の論文「元田永孚の思想形成」明治保守主義思想研究の前提として⁽⁸⁾は興味深いものである。

以下、私は、元田永孚自身による『還暦之記』、『古稀之記』をはじめとするいくつかの文書、書簡、及び沼田哲氏の上記論文、『元田永孚関係文書』の末尾に載せられた同氏の「解題」、「年表」を主たる手掛りとし、海後宗臣『元田永孚』を含む、諸著作、論文を参考にしながら、まず、元田永孚の誕生（一八一八年）から一八六七年（慶応三年）頃までの歩みと彼に深い関わりのある「実学党」の素描を試みたい。この作業の過程で、侍読就任（一八七一年、明治四年）以後の日本教育史から想像される元田永孚とはすこし異なる人物像がみえてくることになる。

その他、参考になったいくつかの文献を記しておきたい。

熊本における実学党とその推移に関しては、本山幸彦『近代日本の政治と教育』⁽⁹⁾、森田誠一『熊本県の歴史』⁽¹⁰⁾、儒学

者元田永孚とその評価に関しては、渡辺和靖『増補版・明治思想史』儒教的伝統と近代認識論⁽¹¹⁾、久木幸男「明治儒教と教育」一八八〇年代を中心に⁽¹²⁾、朱子学を中心とする儒学全般に関しては、源了圓『徳川思想史』⁽¹³⁾、島田虔次『朱子学と陽明学』⁽¹⁴⁾、鈴木博雄「天皇制教育思想の形成過程」⁽¹⁵⁾、日本思想史懇談会編『季刊日本思想史』⁽¹⁶⁾、横井小楠の思想⁽¹⁷⁾、同懇談会編『季刊日本思想』⁽¹⁸⁾、外国人の日本研究①⁽¹⁹⁾、などである。

読むべき研究資料は多く残されていることと思う。例えば、『還暦之記』の解説索引である『近代能本』⁽¹⁶⁾（一九七四年）を未だ入手出来ずにいる。それ故、以下の素描は、補足、加筆、訂正を要する不備なものであり、今後資料収集、調査、検討を前提とすることを承知の上で、必要に迫られて書くものである。

(一)

元田永孚は一八一八年（文政元年）一〇月一日、細川家藩士元田三左衛門（一八二〇年元田家を継ぐ）の長男として熊本で生れた。この頃、決しておだやかな時代ではなかった。一八〇三年にはアメリカ船が長崎に現れ、一八〇四年にはロシア使節が長崎に、一八一六年にはイギリスの軍艦が琉球にと、相次いで列強の船舶が来航して開港を求め、彼が生れた一八一八年には、イギリス人ゴルドンが浦賀に来航して通商を要求、幕府はこれを拒否した。幕府は一八〇八年以降、下田、浦賀、相模、房総に砲台を築きはじめ、一八一八年には鎌倉で大砲の試射を行い、翌年には、浦賀奉行を二名に増員するという緊張のはじまる時代であった。文化の面でも、一八一四年、伊能忠敬の『大日本沿海輿地全図』が完成し、一八一五年、杉田玄白の『蘭学事始』が出され、この面でも揺さぶられる頃であった。元田永孚の幼名は大吉、後に改めて伝之丞、やがて永孚と名乗った。字は子中、号は東野である。『還暦之記』によれば、彼

の幼い頃、父が藩主の小姓役として、参勤で、江戸に出ることが多く、祖父元田自泉が一家の中心となっており、その祖父の指針に従って養育され、祖父の訓話教誨を受けて育ったとされる。「母君常ニ曰ク汝胎内ニ在時ニ汝カ祖父君祖母君ノ汝カ性質ヲ稟クルノ善ランコトヲ欲シ其教養ノ厚キ我ヲシテ過食ヲ禁シ茶ヲ飲ムコトヲ禁セシメ……」⁽¹⁸⁾母との直接な関係がもっと自由に語られてよいと思うが、ここに元田永孚の家族観が見える思いがする。いずれにせよ、彼は祖父の影響の大きさを語り続ける。

一八二七年（文政一〇年）、一〇歳から、祖父の口授によって唐詩選、論語を学び、秋には、村井次郎作について孟子の素読の訓練を受け、町熊之助について習字を学んだ。一八二八年（文政一年）八月より、藩校時習館・句読齋に入り、翌年一月より習書齋で学んでいる。武道に関しては、一二歳の時から剣法、撃剣、乗馬、射芸、槍法、体術、砲術などを学ぶが、祖父は武術よりも学問を勧め、本人も武芸より学問に力を注いだとされる。一八三二年（天保三年）、元服し、六月には講堂に入り、吉山茶陵に師事して朱子（一一三〇年～一二〇〇年）の『通鑑綱目』⁽¹⁹⁾を通読した。この『通鑑綱目』は、日本における影響は大きく、その解釈を加えられた名分主義、正名主義は明治維新の尊王倒幕思想の一つの源流となった。⁽²⁰⁾

一八三七年（天保八年）、二〇歳の春、父に従って江戸に入り、新しい経験を得、見分を広めることになる。この年、各地の米価高騰をめぐる不穏な動きのなかで、二月には、大阪の与力大塩平八郎による反乱が起り、六月に入ると、浦賀において、アメリカ船モリソン号を砲撃するという事態が起きている。熊本に帰った元田永孚は、八月になると、自らの努力を認められ、家老長岡監物（是容、一八一三年～一八五九年）を中心に改革された時習館の居寮生として学問を続けることになった。ここで元田永孚は、当時二九歳の塾長横井小楠（平四郎、一八〇九年～一八六九年）に

元田永孚（二）　　「おいたち」（湯木）

直接出会い、身近に接して生活することになる。永孚は、その時の感激を、『還暦之記』に次のように書いている。
 「……余先生ニ遇フハ此日ヲ始メトス其論鋒氣慨識見ノ雄大非常人タルコトヲ知り大ニ敬慕スル所アリ是ヨリ専ラ先生ニ就テ講学シ自ラ謂ラク経書ハ人道ノ軌範忠孝仁義ハ吾心ノ素定スル所其事实ニ運用シ家國ニ達スルハ識眼ヲ歴史ニ注クニアリ诗情ヲ言ウ既ニ好ム所文ヲ学ンテ以テ吾蘊スル所ヲ発暢スヘシ之ヲ以テ居寮三年ノ学ト決シ……」⁽²¹⁾この言葉の中にある「講学シ」、「識眼ヲ歴史ニ注ク」の言葉は、まさに横井小楠の儒学のキーワードである。文中からは、元田永孚が横井小楠に心酔し、師事し、しようとした心の高ぶりを感じ取することができる。一八三九年（天保一〇年）、横井小楠は、藩命により、塾長を辞し、江戸での遊学のため、熊本を去る。⁽²²⁾小楠辞して、塾長柏木文右衛門となり、時習館の学風変化のなかで、「父君急使ノ主命ヲ奉シテ二月江府ニ赴ク留守祖父母君其年老ヒ家事ノ稠繆ニ堪ヘラレ難キヲ以テ余ヲシテ専ラ家事ヲ執ラシム故ニ官ニ謂ヒ退寮ヲ願フ」⁽²³⁾と、一八四一年（天保一二年）春、永孚自らも時習館を辞して家に帰った。しかし、この間に、横井小楠は江戸遊学一年にして、酒の上での失敗から、帰国を命ぜられ、一八四〇年（天保一一年）四月熊本に帰り、同年末逼塞七〇日の処罰を受け、謹慎、反省の生活のなかで、『時務策』などの著作にあたっていた。

一方藩校時習館を退いてからの永孚は、荻昌国、鎌田庄一郎、藪惣左衛門らと荻生徂来（一六六六年～一七二八年）、熊沢蕃山（一六一九年～一六九一年）の著作を読んでいたが、「汪洋トシテ帰着スルヲ得サルカ如シ」⁽²⁴⁾と感ずる。しかし、「孟子ノ書ヲ取テ之ヲ読ミ其何必曰利亦有仁義而已矣人皆有不忍人之心以不忍人之心行不忍人之政天下可運於掌養生喪死無憾王道之始也」ト云ヲ見テ忽然トシテ覚ル所アリ謂ラク天下ヲ治ムルハ吾心ノ仁ニ在リ外ニ求ムヘカラス」⁽²⁵⁾と語る。この「覚ル所」は後年の元田永孚の言行にどのように顕れるのかと問うておきたい。

やがて、永孚と荻とは、あらためて横井小楠に共感するところあり、家老を辞した長岡監物（是容）、下津休也、横井小楠、荻昌国、元田永孚による講学が始まることになる。このあたりの事情について、永孚は次のように記している。「横井子ノ論ヲ聞テ大ニ感発シ其見ル所ノ一轍ニ出ツルヲ喜フ荻子ト余ト亦己ニ覚ル所アリテ未タ正ニ有道ニ就カス下津横井二先生此説ヲルヲ聽テ大ニ發揮シ復疑フ所ナシ会會長岡大夫史学ニ志シ横井子荻子及余ヲ招キ通鑑綱目（漢唐宋三紀）ヲ会読ス大夫曾テ山崎淺見先生ヲ信シテ經学ニ得ル所アリ道德忠誠之ヲ天資ニ得テ学フ所最モ義理ニ在リ但歴史ニ涉ラサルヲ以テ横井子延テ史学ヲ講スルナリ横井子余等ニ謂テ曰ク大夫史学ニ乏シキヲ以テ吾儕ヲ招テ学友ト為ス其志優ナリ吾儕未タ經学ニ達セス何ソ大夫ニ就ニ經ヲ講セサルヘケン乎是ニ於テ大夫ニ謂ヒ先ツ近思錄ノ会読ヨリ始ム是ヲ長岡大夫下津横井二先生荻子余ト会合ノ始ニシテ実学ノ權輿トス」。⁽²⁶⁾毎月一〇回、二〇回、あるいは連日集会したといわれる。「權輿」とは始まりの意であり、この講学の群を人びとは、やがて、「実学党」と呼ぶようになる。⁽²⁷⁾なお、この元田永孚の言葉から、のちに長岡監物と横井小楠との意見が離反する一つの理由が見えてくるように思われる。一八四四年（弘化元年）、長岡監物が、再度文武芸倡方として、時習館の監督にあたるようになると、上記五名によって始まった講学への参加者も次第に増し、実学党は藩内での勢力となる。同年一〇月、二七歳の元田永孚は長崎に旅し、眼前に、入港中のオランダ船に接し、時代の緊張を身に感ずる。帰途、佐賀、久留米、柳川の各藩を巡るが、佐賀藩では製鉄、外航船建造など技術的努力に感動し、久留米では勤王派の神官真木和泉守を訪ね、水戸学への関心を引き起している。このことを契機としてなされる会沢安（一七八二年～一八六三年）の『新論』（一八二五年）への接近は、彼の思想形成にとって重要である。⁽²⁸⁾⁽²⁹⁾

その後、藩政をめぐり、実学党と学校党との抗争が起り、正統儒教を自認し、佐幕路線をとる学校党が制するところ

元田永孚（二）　（おいたち）（湯木）

ろとなった。この圧力のもとで、水戸藩に近いと目されていた実学党の長岡監物は、一八四七年（弘化四年）三月失脚、家老職を辞するに至る。以後、藩内における実学党の力は急速に弱まる。この年、元田永孚は、藩主側近であった父から、「長岡大夫其忠賢一国ノ人物タルハ素ヨリ論ヲ待タス然トモ其言行ノ当世ニ遇ハスシテ家老職を辞スルニ至リテハ大ニ君公ノ心ニ違却スル所アリ予今度金屋駅ニ於テ君公ニ謁ス君公ノ言ニ曰ク監物如レ此一国ノ紛紜モ果シテ如何汝カ子伝之丞監物派ノ一人ナリ汝心ヲ勞スルナラント懇々告示セラレタリ予是ニ因テ君公ノ心ヲ体シ処置スルヘシ汝姑ク実学ヲ止メテ丈夫ノ会読ヲ辞セヨ⁽³⁰⁾」と、実学党からの離脱を求められ、説得かなわず、会読交友を謝辞するに至る。⁽³¹⁾「藩—家」の構造・枠組みなかでの出来事であった。永孚三〇歳。

一八五三年（嘉永六年）、長岡監物は、再び引き出され、浦賀守衛隊の総指導官に任ぜられる。同年六月、アメリカ東インド艦隊司令長官ペリーが艦隊をひきいて浦賀に来航、これに対応するためであった。長岡監物の再起用は実学党の再興を思わせたが、一八五五年（安政二年）、永孚三八歳の年、『大学』首章解釈をめぐる⁽³²⁾、実学党の分裂となる。一方は、長岡監物に従う長岡派（坪井派）、他方は、横井小楠を中心とする横井派（沼山派）と呼ばれる⁽³²⁾。この点に関しては、森田誠一氏のように、「本質は政治に対する実践的根拠の相違から必然的に生れたたものである。」とする理解もある。「実践的根拠」という言葉による説明よりもっと正確な表現が必要であろうが、議論の求められるところである。実学党を離脱している元田永孚は、ここでも、両者に対して距離を置き、「余モ亦会読ニ連ナラサルヲ以テ此事ニ関セス⁽³³⁾」としている。

一八五八年（安政五年）、横井小楠は越前藩に招かれ、藩主松平慶永の顧問としての任につくべく同地に赴く。前年父を失い家督相続した元田永孚は、その後、熊本入りする横井小楠としばしば会うことになる。この頃、永孚は、「一

藩ノ政事旧規ヲ遵奉シテ失誤鮮シト雖トモ天下ノ時体ヲ知ラ」ぬ学校党の主導に不満をもち、批判的であるが、同時に、藩の枠をはみ出す「処士横議」にもきわめて批判的であった。⁽³⁴⁾一八六一年（文久元年）八月、四四歳の永孚は、藩主細川慶順に随行して江戸に向い、激しい時代の推移を体験する。前年（一八六〇年）三月には、井伊直弼が桜田門外で水戸・薩摩の浪士に殺害され、一月には、アメリカ通訳ヒューケンスが三田で斬られている。この年には、対馬をめぐる英露が対立し、また將軍家茂による諸外国への開市開港延期要請が行われた。翌一八六二年（文久二年）一月には、老中安藤信正が坂下門外で襲われ、七月、幕府は諸藩に艦船購入の自由を認めるに至った頃のことであった。しかし、この年、熊本に残した妻琴子の急死により、一〇月熊本に戻り、官職を辞してしまう。ところが、一二月には、京都の留守居を命じられ京都に入る。「余力意窃ニ惟ニ神州ノ国是タルヤ当ニ国ヲ開キ化ヲ敷キ以テ外万国ヲ待ツヘシ豈拘々トシテ鎖国攘夷ヲ以テ国ヲ立ツヘケンヤ況ヤ外国ノ富強加フルニ軍艦銃炮ノ堅牢銳利万敵スヘカラサルヲヤ苟モ国ヲ開キ道ヲ明カニシテ彼ヲ待ツ彼虎狼心アルモ我正義直進ヲ害スルコト能ハスシテ我国ヲ立ツヘシ若シ攘夷ヲ以テ彼ヲ待ツ彼未タ夷ナラスシテ我之ヲ夷トシ彼未タ戦ヲ求メスシテ我之ヲ攘フ是疎暴ノ甚シキ者既ニ以テ我国是ト為スヘカラスシテ彼ノ我ヲ侮トリ我ヲ仇トスル其利害勝敗論ヲ待タスシテ明カナリ今ヤ朝議茲に向フカ如クナラバ余此際ニ当リ周旋盡力以テ職ヲ奉シ国ニ奉ジスヘシ……列藩ノ壮士浮浪京師ニ集マリ公家ヲ聳動スルモ皆攘夷ノ説ニシテ而シテ近ク我藩ノ士良之助公ニ随從シテ上京セシ住江轟木宮部川上山田等ノ唱フル所亦皆攘夷ノ論ナリ皆総テ余力所見ト大ニ反討スレハ余何ソ此間ニ向テ見ル所ヲ行ヒ周旋ノ力ヲ伸フルコトヲ得ンヤ……」⁽³⁵⁾、後年永孚の記す、その頃の彼の開国論、使命観、不満である。しかし、これはあくまで幕府および自藩（肥後藩）に忠実であらうとする立場でもある。越後藩のみならず各藩の上洛を主張する横井子楠とは相入れない見解である。一八六三

年（文久三年）六月帰藩。一八六四年（元治元年）、永孚は、第一次長州戦争に出陣するが、一八六六年（慶応二年）の第二次長州戦争には藩の出兵に反対する。何故であろうか。一八六七年（慶応三年）十二月、大政奉還、王政復古に直面して、永孚は、藩主の速かな上京を主張する。この年の末、高瀬町奉行に、翌一八六八年（慶応四年、九月八日より明治元年）四月、用人奉行に任ぜられる。

一八六七年（慶応三年）十二月二十七日に津田山三郎（翌年征討軍副参謀となる）宛の手紙に、「……今度御大変革一条被仰越候、誠に非常の御一挙にて、就ては内外目他にかけ、御苦心御尽力の次第御紙表に顕れ奉感佩候。……徳川公御動揺無之こと鉄石のごとく被為在候段、実に感服仕候。此上弥以御勘忍、削地東帰種々の降命慎而御請被成候而、皇国への御誠忠相立候様にとのみ奉懇祈候。……」⁽³⁶⁾とあり、徳川公に動揺のないことを喜びながら、語り口が移行することが感じられる。ここで始めて「皇国」という言葉が出現することは興味深い。

以上、東野と号して隠居する直前、一八六八年までの元田永孚の生涯の素描である。

(三)

熊本の肥後藩の藩校時習館は、一七四五年（宝暦四年）、藩主細川重賢が創設。以来、藩士たちは御用学問である朱子学だけでなく、陽明学、古学、国学、医学などを学んだ。一九世紀初頭、肥後藩藩政の要所はすべてこの藩校時習館の出身者によって占められていた。しかし、当時の学風については、一八三七年（天保八年）、元田永孚が横井小楠に学問について質問をした際、永孚が後年記した小楠の応答にみられるような批判があったようである。「先生曰ク藩校ノ興ル宝暦ノ盛時ニアリテ其舉ハ素ヨリ美ナリト雖トモ学問正大ナラス秋玉山徂徠ヲ主トシテ専ラ文献ノ学藪孤山

家学ニ由テ程朱ノ学ヲ唱ヘ其実ハ政事ノ才ナリ高本以下ハ又小ナリ安野ノ学吏才ヲ貴トシテ僅ニ宋名臣言行録一部ヲ熟読スルノミ凡ソ学問ハ古今治乱興廃ヲ洞見シテ己レノ知識ヲ達スルニアリ⁽³⁷⁾。つまり、その学風は、しばしば解説として語られるように、訓詁註釈主義、形成主義、詞章記誦の末に走るものとして批判されている。すでに述べたように、横井小楠は、歴史に注目し、学政一致、経世的な学問の必要を説くのである。それ以前、肥後藩に、このような主張がなかったわけではない。李退溪―山崎闇斎（一六一八年―一六八二年）―肥後の大塚退野（一六七七年―一七五〇年）につながる朱子学の伝統である。楠本正継氏の研究に示されるように、大塚退野の学は悟りに基いた実践をめざす学、心より世の実用に献身する学問であった。長岡監物、横井小楠たちはこの立場を継承する人達であった。

元田永孚が荻昌国らと会読を始めるは一八四一年（天保十二年）、さらに、長岡監物、横井小楠、下津休也、荻昌国らとの会読に入るのは一八四三年（天保四年）頃である。この会読の群の傾向が、前記大塚退野の学の方角をもつことは容易に理解できよう。人はこの人達を実学党と呼んだ。熊本における実学党の成立が一八四二年から一八四四年までのいずれの年月かを問う議論がある⁽³⁹⁾。しかし、会読の群は、各自それぞれの意思で、自発的に集ったものであるならば、どの時点で成立したかと問うのは無理であろうし、呼称は自然発生的なものである。この時期についての議論はそれほど意味がある議論とは考えられない。ただ、天保のこの頃、全国的な米の大凶作があり、米価高騰し、肥後藩は収入を増した。しかし、この利は庶民にとどかず、やがて起った米価暴落は、藩庫の減収となり、一八四二年（天保十三年）には、下級武士を中心に、大きな困難をもたらした。政治の改革を訴える横井小楠らの実学党は、この時期に、広範な層からの支持を得るに至った。実学党の主要な主張は、藩上層の奢侈を禁じ下士を潤すこと、離村農民の還農政策、貨殖政策を廃し特権商人を藩権力から切り離すこと、などである⁽⁴⁰⁾。藩支配層はこの動きを危険なもの

として警戒し、圧力を加えることになる。この藩の立場を支持する主流派は、実学党に対するものとして、学校党と呼ばれた。両党の対立は明治期にまでおよぶ。やがて、肥後藩は、実学党を、一八四四年幕府より蟄居を命ぜられた水戸の徳川斉昭、藤田東湖に通ずるものとして排し、長岡監物は、同年、家老職を辞する。永孚が実学党を離れるのはこの時であり、このような経緯のもとで、さらに実学党自体、一八五五年（安政二年）分裂を起す。

この分裂は、前論文でふれたように、一般には、『大学』経一章の「大学之道、在明々徳、在親民、在止於至善」の理解をめぐって起きたとされる。長岡監物は為政に当る者たちの道徳的修養を主張し、横井小楠は親民の実をあげることを主張することにより、両者対立分裂を結果することになったとされる。横井派は彼の居住の地名から沼山実学と呼ばれ、長岡派もまた、同じ理由で、坪井実学と称された。しかし、このような理論的な対立を引起すさまざまな現実的な理由も考えられねばならないであろう。長岡監物が、家老を辞したとはいえ、なお藩主を護るという身についていた姿勢を保とうとしたとすれば、伝統的ともいえるこの理解に身を寄せ、横井小楠と対立することは避けられなかったとも考えられる。また、横井小楠が『時務策』で主張する、領主と異なる「士民の利益に成る」富の理念は、やがて、反幕藩体制へと動き、藩権力と衝突さざるをえなくなる契機をもっていたともいえよう。この頃、実学党を離れている元田永孚の立場はきわめて不明確である。後の『還暦之記』の言葉はともかく、この頃の永孚の身の処し方についての資料から検討を重ねる必要がある。

ところで、実学党が水戸に近いとして排されたことについてふれるならば、一八三九年、江戸遊学を命じられた横井小楠は、江戸で、藤田東湖と交わり、帰国謹慎の頃から大塚退野の思想に傾倒を始めたといわれる。⁽⁴²⁾ 長岡監物もまた浦賀警備にあたった一八五三年頃、藤田東湖に出会っている。

彼らが接し、影響を受けた水戸学とは、儒学の名分論を基調とする天皇家尊敬（尊王）の思想である。ただ、そのなかには、政権、藩権力を返上することは考えられていない。近世から概観すれば、水戸の徳川光圀（一六二八年～一七〇〇年）による「大日本史」の編纂が始って以来、代々の藩主はこれを継承し、水戸藩の文教はこの編纂と共に進み、水戸藩独自の「水戸学」なるものを形成した。後期になると、この水戸学は、藤田幽谷（一七七四年～一八二六年）、藤田東湖（一八〇六年～一八五五年）父子、会沢安（一七八二年～一八六三年）によって引き継がれ、展開される。藤田幽谷は、若い日の著作『正名論』（一七九〇年代）に、「赫々たる日本は皇祖国を開きしより、天を父とし地を母とす。聖子神孫、世、明德を継ぎ、以て四海に照臨す。四海の内、これを尊んで天皇という。……君臣の名、上下の分、正かつ厳、なお天地の易うべからざるごときなり」と記して正名論を展開する。会沢安は、『新論』（一八二五年）において、藤田東湖も、『正気歌』（一八四四～七年の間）、『弘道館記述義』（一八四七年）において、国体の尊厳を歴史的に明らかにし、儒教のいう名分を正すことを論じ、皇室尊崇の念を強調する。しかし、また、將軍家を皇室の臣下として位置付け、このことによって幕府の権威を高めることを意図するものであった。⁽⁴³⁾

正名の論は、『論語』子路篇の孔子の言葉に基く。元来、言葉の概念を正しくするという意味であったが、やがて、名実一致を求め、名に即応する実質の存在を意味すると思われるようになる。さらに、その倫理的規定は、君臣父子などの名称には相応の責任、本分が附随する、つまり名分を正すの意に用いられるようになった。しかし、島田虔次氏の論述のように、「〈父子天合、君臣義合〉が儒教の基礎定理であり、朱子学もその外に出るものではなかった。……〈義の合せざれば去る〉を公式的な君臣関係から、否、あっさり言っただけならば、官僚体系から離脱することのみを意味する。……旧中国における君臣関係を考える際、臣という語はむしろ、最高の長官（国家元首）との関

係において見られた官僚、とでもいう意味で解する方がわかりやすい場合がある⁽⁴⁴⁾、と理解するならば、水戸学の理論とその影響下にある実学党の主張をどのように分析すればよいのであろうか。あるいは松本三之助氏の言葉⁽⁴⁵⁾を借りて、儒教尊王主義の形成は「朱子学的自然法思想の解体から登場する過程」と把握することができようか。元田永孚の成長過程をたどっても、彼自身のうちに、一貫して明確な理念があるようには思えない。実学党の中にも、あの激しい時代状況の推移のなかで、水戸学から学ぶことに多様なものがあつたに違いない。

今後、これまで書いてきた記述について、検討、補足を積重ねながら、明治期の日本教育史から切り離し難い元田永孚の思想とその形成過程の実像を把握してゆきたいと願う。

注

- (1) 元田竹彦・海後宗臣『元田永孚文書』第一巻、元田文書研究会、一九六九年。なお第二巻には一八七五年（明治五年）以降の進講録が、第三巻には元田の論語講義の稿本が収められている。
- (2) 沼田哲・元田竹彦『元田永孚関係文書』、一九八五年、山川出版。
- (3) 海後宗臣『元田永孚』、一九四二年、文教書院。なお同書は『海後宗臣著作集』第三巻、一九八一年、東京書籍に収められている。
- (4) 海後宗臣、上掲書、巻末の解題、六九七頁。
- (5) 沼田哲・元田竹彦編『元田永孚関係文書』の沼田哲氏による解題、四頁。
- (6) 『海後宗臣著作集』第三巻、一九八一年、六九六頁の解説。
- (7) 森川輝紀『教育勅語への道』、一九九〇年、三元社、八二頁。
- (8) 沼田哲「元田永孚の思想形成と明治保守主義思想研究の前提として」『文経論叢』第二二巻第四号、一九七七年、弘前大学人文学部。なお明治保守主義の問題については、あらためて検討したい。
- (9) 本山幸彦『近代日本の政治と教育』一九七二年、ミネルヴァ書房。

- (10) 森田誠一『熊本県の歴史』、山川出版
- (11) 渡辺和靖『増補版・明治思想史』、儒教的伝統と近代認識論』一九八五年、ぺりかん社。
- (12) 久木幸男『明治儒教と教育』一八八〇年代を中心に『横浜国大教育紀要』二八、一九八八年、横浜国大教育学部。
- (13) 源了圓『徳川思想史』一九七三年、中央公論社。
- (14) 島田虔次『朱子学と陽明学』一九六七年、岩波書店。
- (15) 鈴木博雄『天皇制教育の形成過程』『世界教育史大系2』一九七五年、講談社。
- (16) 日本思想史懇談会編『季刊日本思想史37』横井小楠の思想』一九九一年、ぺりかん社。
- (17) 日本思想史懇談会編『季刊日本思想史31』外国人の日本研究①』一九八八年、ぺりかん社。
- (18) 「還暦之記」『元田永孚文書』I、三頁。
- (19) 『通鑑綱目』は南宋の朱熹（朱子は後世の尊称）が、宗の司馬光が神宗（一〇六七―八五）の時代に完成した『資治通鑑』（周の威烈王の二三年から後周の世宗にいたる一三六六年間の歴代君臣の事跡を編年体で編纂した書）を綱目に分けて義例を配した著作である。
- (20) 島田虔次『朱子学と陽明学』一九六七年、岩波書店、七九頁参照。
- (21) 「還暦之記」『元田永孚文書』I、二二頁。
- (22) 「還暦之記」『元田永孚文書』I、二三頁。なお「特ニ遊学ノ藩命ヲ蒙ルハ容易ノ才学ニシテ得ヘカラス最学士ノ栄
- 元田永孚（二）　　『おいたち』（湯木）
- 響トナス……」と理由が記されている。
- (23) 「還暦之記」『元田永孚文書』I、二三頁。
- (24) (25) (26) 「還暦之記」『元田永孚文書』I、二六―二七頁。
- (27) 元田永孚は「森文相に対する教育意見書」（一八八七年、明治二〇年）で、「足下の僕を見るや、漢学者流を以て之を見ず、僕固より然り、然ども僕は故長岡監物横井平四郎の徒、從來漢学者流の腐儒たると惡む」と実学党に属したことを誇っている。
- (28) 「還暦之記」『元田永孚文書』I、三三頁
- (29) 永孚はやがて、「森文相に対する教育意見書」で、「孔子を信ずると雖ども佛教者の釈迦を排し、邪蘇信者の邪蘇を信ずるが如きに非ず。孔子の教は、吾国にありては吾君を愛し、吾父の子となりては吾父を愛して、孔子を愛せざるを以て吾道と心得るを以て、日本の今日にありては、忠孝の大道を其時々活用するを以て僕の学問とするなれば、当世の支那好き文章家考證学の奴隸にあらざるなり。唯日本は日本の道を立て、日本の教育を行わんことを熱心に堪えるなり」と主張することになる。
- (30) (31) 「還暦之記」『元田永孚文書』I、四五―四七頁
- (32) 森田誠一『熊本県の歴史』山川出版、二四九頁。
- (33) 「還暦之記」『元田永孚文書』I、五〇頁。
- (34) 「還暦之記」『元田永孚文書』I、七〇―七二頁、沼田哲「元田永孚の思想形成」『文経論叢』一二巻四号、弘前大学人文学部、一六頁。

- (35) 「還暦之記」『元田永孚文書』Ⅰ、八二―八三頁。
- (36) 沼田哲・元田竹彦篇『元田永孚関係文書』一九八五年、山川出版、一七四頁
- (37) 「還暦之記」『元田永孚文書』Ⅰ、一二頁。山崎正薫『横井小楠上巻伝記篇』、九八―一〇〇頁参照。
- (38) 楠本正継「大塚退野ならびにその学派の思想」『楠本正継先生中国哲学研究』参照。
- (39) 沼田哲「元田永孚の思想形成」『文経論叢』、二七頁、注二八参照。沼田氏は松浦玲氏（『横井小楠』朝日新聞社）と共に一八四四年をとるとされている。
- (40) 横井小楠『肥後藩時務策』一八四三年（天保一四年）。
- (41) 湯木「元田永孚（一）」『神学研究』三八号、一九九一年、関西学院大学神学部神学研究会、二四七頁。
- (42) 森田誠一『熊本県の歴史』、二四六頁。
- (43) 鈴木博雄「天皇制教育の形成過程」『世界教育史体係2』、二一五頁参照。なお鈴木氏は水戸学の尊攘思想の特徴を次のようにまとめている。
- 一、『大日本史』編纂に示される日本歴史認識と儒教名分論的倫理説。
- 二、討幕的なものでなく、天皇を頂点とする封建的身分秩序を肯定する武士中心の国民意識。
- 三、藤田東湖、会沢安などの鼓吹者を得、国民の民族感情に訴えた。
- 四、水戸学の尊攘思想は多くの藩校に影響を与えた。
- (44) 島田虔次『朱子学と陽明学』一九六七年（一九九〇年、二五刷）、九七―一〇〇頁。白川静『孔子伝』（一九九一年、中央公論社）一二九頁には『論語』には忠臣という考え方はない。忠は誠実というほどの意味である」とされている。
- (45) 松本三之助『天皇制国家と政治思想』一九八〇年、未来社、一六三頁。